

天保飢饉がひと段落した頃、その後の五郎左衛門の運命に大きな影響を与える旗本が幕閣に登場して来た。 矢部定謙、鳥居耀蔵、それに遠山景元である。

### 1) 矢部の獵官活動

矢部定謙には「人格高潔にして幕末三俊の一に数えられる良吏だった」、「大岡越前、遠山左衛門尉とならぶ名奉行」などの良い評価がある一方、「密偵を使って他人の秘密を暴く人」、「賄賂を使って地位を得た謀略の人」という否定的な評価もある。 どちらも一面で正しいのだろう。

勘定奉行を罷免された後、閑職の西の丸留守居、小普請支配から南町奉行という旗本最高の職を射止めたのは「お救い米事件」をネタにした獵官活動の結果と見る評価が多い。

ここでは表舞台復活のため矢部が展開した「獵官活動」を検証する。

矢部は最初わずか300俵取りという小禄であったが、その勤勉実直さが買われ、いきなり堺奉行に任命され周囲を驚かせた。

その後2年間堺奉行をそつなく勤めた後、大坂町奉行に転じた矢部は、天保飢饉がピークを迎えていた天保5年(1834)から7年(1836)に東町奉行の任にあった。 既に奉行所の与力を引退していた大塩平八郎とも親交があり、大塩の意見を入れて飢饉で苦しむ大坂窮民の救済にあたったという。

天保7年、江戸に戻り勘定奉行に栄進した。勘定奉行は旗本で到達しうる最高ポストのひとつ。 定員4人で、うち2人が財政・民政を扱う勝手方、残り2人が訴訟関連を扱う公事方となった。 このように勘定奉行という名称のみが共通しているが勝手方と公事方の職務は全く別のものであった。

勘定奉行在任中、天保飢饉で困窮する町民を救済するための町奉行所によるお救い米調達を財政担当の立場から見ていたが、このお救米の買付に不正があると聞き、内々に調査を進めた。 しかしこの時は、「さほどの事はない」と特に摘発もしなかった。

2年後の天保9年(1838)、西の丸の再建問題をめぐって老中水野忠邦との対立があった。西の丸を何としても再建したいという水野に対して、幕府財政を預かる勘定奉行の立場から再建はならないと主張したのだ。 天下の実力者水野に楯突く姿は「硬骨漢」のイメージがある。 この対立のため、矢部は勘定奉行を罷免され、「西の丸留守居役」に左遷された。

西の丸留守居役は功なり名を遂げた旗本が最後につく、いわば「あがり」の役職で、格は高いが閑職であった。 まだ50歳前の矢部は「あがり」にはまだ早く、何とかもう一度表舞台に復帰したいと思っていた。

2年後の天保11年(1830)、矢部は西の丸留守居役から小普請支配に転じた。勘定奉行や町奉行に比べればはるかに地味な役職である。

小普請奉行は、江戸城をはじめ、徳川家の菩提所である寛永寺、増上寺などの営繕・修理などを担当するが、3千石未満の旗本、御家人全員が小普請組に編入されるから、配下が多い役職でもあった。

この小普請奉行の座にあきたらない矢部は、狙いを「町奉行」の座に定めた。

大坂、京都、長崎、駿府、山田、堺、山田、奈良など各地に設けられた町奉行は、それぞれ地名を冠して大坂町奉行、駿府町奉行などと呼ばれるが、江戸の町奉行は単に「町奉行」あるいは「御町奉行」「町御奉行」と呼ばれ、別格であった。

寺社奉行、勘定奉行と合わせて3奉行行と称され、現在の最高裁とも言える評定所の構成メンバーであり、幕政にも参与する立場であった。

基本的に定員は2人、江戸初期には大名が任命されたが、後に3千石程度の高級旗本が任命された。更に江戸後期になると足高制度により、石高が低い旗本であっても能力であれば任命できるようになった

このため、地方の町奉行を歴任した旗本が、江戸に戻って幕府の要職をいくつか経験し、最終的に町奉行に就任するという旗本の出世コースの最高役職と見られるようになっていたが、能力や野心を持つ旗本にとって、町奉行は垂涎のポストであった

天保12年(1841)当時の町奉行は、南が筒井伊賀守、北が遠山左衛門尉。このどちらかを蹴落とさないと町奉行になれない。

矢部が目をつけたのが20年以上も南町奉行の座にいる筒井伊賀守である。矢部は前から密かに内偵していた天保7年(1836)のお救い米買付を思い出した。

既に4年もたっているが、筒井を告発するのはこれしかないと考え、調査に拍車をかけた。不正を見逃せないという正義感からでなく、この問題を告発して筒井の責任を問い、自分がその後任に座ろうと思うようになった。

矢部は清廉潔白な人と評価されることもあるが、親交のあった水戸藩士藤田東湖に「自分がここまで来れたのは賄賂のおかげだ。」と語ったという記録が残っている。

また、在野の江戸史研究で名高い三田村鳶魚は「矢部はすこぶる陰の暗い人で、大いに探偵根性が突っ張っている」とし、更に「それから、矢部がすっかり探偵好きになってしまっ、探偵を盛んに用いて人を排斥したり、立身出世の道具にしたりしたので、えらい騒動を惹き起すことにもなった」とも書いている。

矢部は、江戸の商人・仙波太郎兵衛を密かに呼び寄せ「御救米勘定書控」を提出させた。仙波は五郎左衛門の指示でお救い米買付の資金を出し、買付そのものにも関わっていた。

しかしこの記録では、奉行所の命令が強引で仙波達商人が大きな損失を出したことはわかるが、それは飢餓に苦しむ江戸市民を救済するためで不正にはあたらない。

五郎左衛門の配下で買付にあたった年番下役同心の佐久間伝蔵や堀口六左衛門との接触をはかり買付の実情を探った。

硬骨漢の佐久間は決して内情を話さなかった。しかししばらくして堀口が口を割り、内幕を話しはじめた。

矢部は堀口に、この調査がうまく行けば自分自身が南町奉行になると話し、そうなったら堀口を優遇し、また堀口の罪は問わないと約束したという説がある。

また三田村の著書には矢部が堀口の娘に近づき、ついにその娘を妾にして堀口を籠絡したと書いている（巻末 史料編 参照）が、これが事実であるかどうか確認できない。

後にこの留守居役時代、小普請支配時代のお救い米事件探索は、本来の業務以外の「支配違い」として罪のひとつに数えられているが、とにかく堀口の「寝返り」でお救い米買付に不正があったという情報を掴んだ矢部はこれを報告書にまとめ、老中水野越前守忠邦に提出した。

また、日本法制史専攻の山中雅子氏は鈴鹿国際大学紀要（No.10 2003年）の中で、矢部の狛官運動について書いている。

—そもそもこの処分の発端は、5年前に遡った天保7年(1836)江戸市中御救米取扱掛買付不正事件と称されるものである。

当時、天保6、7年の全国的な飢饉によって、米値段は高騰し庶民は困窮を極めていた。このとき江戸市中の御救米取扱掛を勤めたのが、南町奉行所与力仁杉五郎左衛門である。

仁杉は役務上の立場を利用して不正を行ったというのだが、この事件を矢部は勘定奉行・西丸留守居役在任中ずっと調査し続けた。しかし、矢部が南町奉行に就任してからは、その調査を等閑にしたのみならず、同心堀口六左衛門の倅貞五郎、高木平次兵衛を殺傷した佐久間伝蔵の刃傷事件も一連の不正事件とは切離し、さらに、不正を行った与力仁杉五郎左衛門に対する処分も江戸の危急を救った骨折りを考慮対象として矢部は幕閣に軽い処分を願い出たというのである。

事件当時、定謙は勘定奉行として浅草米廩取締を行っていたため、不正事件の調査は役目柄筋違いの調査ともいえないが、その後の西丸留守居役当時においては筋違いの調査であろう。

また、矢部の南町奉行就任後における仁杉五郎左衛門御救米不正事件の放置はそれまでの調査姿勢と矛盾するように思われる。

あくまでも推測の域を出ないが、このあと述べる大塩平八郎の告発内容を勘案し、さらに穿った見方を付け加えるならば、矢部はこの不正事件を暴き立てた功績で町奉行職に取り立てて貰う積もりがあったのではないかと。

つまり、彼は狛官運動の一つとして事件を調査していたが、そこへ思いがけず町奉行に起用されたので、そのまま事件を等閑にして隠蔽工作を行い、事を終わらせたかったという筋書きは如何であろうか。

老中首座になっていた水野は前将軍家斉が死去して頭の上の重石がなくなり、後に「天保の改革」と呼ばれる改革に着手しようとしていた天保 12 年早々のことである。

## 2) 矢部の町奉行就任

水野は改革を進める上で町奉行の職が重要と考えていた。既に 20 年以上も南町奉行の職にある筒井伊賀守は、周囲の評判は良いものの改革には不向きと考えていたから、かわりに実務派の奉行候補を物色していた。そこに矢部の報告書である。

単にお救い米の不正を告発するだけでなく、改革あるいは江戸の行政についての意見も書かれていたのであろうか。矢部の狙いは見事に当たった。

天保 12 年（1841）4 月 28 日、筒井伊賀守は町奉行を罷免され、西の丸留守居役に左遷された。筒井は旗本久世広景の次男として生まれたが、21 歳の時に旗本筒井正盈の養子となり、若年の頃は柴野栗山に学び、昌平坂学問所で頭角をあらわした。

二の丸留守居、西の丸徒頭、西の丸目付、目付などを経て、文化 14 年（1817）長崎奉行となり、文政 4 年（1821）の正月 29 日から南町奉行を勤めていた。この間、近藤重蔵、富蔵殺傷の一件、仙石騒動の審理、天保の飢饉対策などの民政に関わり、名奉行の一人と称されていた。

五郎左衛門は与力として出仕していた 40 年間のうち半分以上は筒井に仕えていたことになる。特に最後の数年間は年番方、いわばナンバー 2 として筒井を支えて来た。

この時期、お救い米不正事件というものはまだ立件されていない。だが矢部は手段を選ばず内定を続け、ついにそれを報告者にまとめ老中に提出したのである。

筒井は前述のように、天保 8 年（1837）12 月 26 日、飢饉に困窮する市中のものを救助するについて心を尽くした、と賞せられていたのに、一転してお救い米調達の監督責任を問われ、21 年勤めた町奉行の座を追われることになった。

筒井は翌年 3 月 21 日、関係者一同と同時に判決申渡を受けているが、これについては第十四章で述べる。

こうして矢部は筒井の後任の奉行に就任した。それまで左近将監を名乗っていたが、8 月 12 日に駿河守と改称している。

町奉行に就任した矢部はその職権で更に御救米事件の探索を続けるかと思いきや、さにあらず、むしろ五郎左衛門たちの行動を困窮する江戸市民を救うために止むを得ないものとして容認し、五郎左衛門に対しては謹慎あるいはお暇（引退）程度の処分ですぐ済まそうとした。

矢部の探索に協力した堀口六左衛門がどのように優遇されたか。天保 2 年、9 年、12 年の町鑑で見ると同じ年番下役とあり、息子の貞五郎も御詮議役下役で特に変化はない。

しかし御救米買付にあたった佐久間などの同心仲間との間には疑心暗鬼が生まれたようだ。これが 6 月に起きた奉行所内刃傷事件の伏線となる。

矢部は後になって、南町奉行に就任するまでの調査活動が権限外の事であり、且つそこまで調べておきながら奉行に就任後には、この事件は「やむを得ない事情があった」と寛大な処置をしたのは適切でなかったと指摘されている。

### 3) 鳥居の暗躍

矢部の町奉行就任を妬ましく思っていた旗本がいた。鳥居忠耀である。

老中首座になっていた水野忠邦に目をかけられ、次第に幕閣の実力者になりつつあった鳥居は、この天保9年には目付の職にあった。目付は若年寄に属し旗本、御家人を監察する役目であり、配下に徒目付、小十人目付などがいた。

一矢部は前任者・筒井伊賀守のアラ探しをして首尾よくクビにし、自分がその後任に納まった。俺も矢部の罪を暴いて町奉行の座から引きずりおろしてやろう、さすれば・・・。

と思ったであろう。

徒目付や小十人目付などの配下のみならず、本庄茂平次など正式の家臣ではないが、鳥居の屋敷に出入りしている浪人ものまで使って矢部のアラ探しを始めた。しかし、矢部をクビにするほどのネタがそうそうあるわけではない。

こんな時、鳥居が忌み嫌う「洋学かぶれ」の1人が表舞台に立って来た。長崎の町年寄・高島秋帆である。

この時代、長い鎖国の夢を破る異国船が各地に渡来し、心ある人達は日本の国防について関心を寄せていた。

尚齒会は、目付鳥居耀蔵の弾圧で完全に消滅状態になっていたが、長崎の町年寄・高島秋帆は、清国がイギリスとの戦争（アヘン戦争）に敗れたことを知り、幕府に国防についての意見書を提出して、この年の5月9日、江戸で砲術の公開演習を行なう事になった

日本で唯一の海外と通じた都市・長崎で生まれ育った高島は、日本砲術と西洋砲術の格差を知って愕然とし、オランダ語や洋式砲術を学び、私費でオランダから大筒等を買揃え、高島流砲術を完成させていた。

五郎左衛門は若い頃、荻野流の大筒を稽古し、鎌倉海岸での大筒稽古にも何回か参加している。尚齒会の会合ではその和式大筒が海外諸国の大筒に比べれば、その性能・威力が段違いに劣る事を聞いていたから、年番方として多忙な毎日であったが、5月9日、江戸北西の郊外徳丸ヶ原（現在の高島平）に行き、洋式砲術と洋式銃陣の公開演習を見物した。

高島から訓練を受けた兵士、砲士達は筒袖上衣に裁着（たっつけ）袴、頭に黒塗円錐形の銃陣笠をかぶり、その動きはきびきびとして統制がとれ、見事なものであった

誰もがこの洋式砲術の見事さに、もし外国勢が日本に攻めてきたらひとたまりがないだろうと思った。日本の砲術の性能をよく知っている五郎左衛門はこの演習を見て、彼我の差に背筋が寒くなるような思いをした。

鳥居はこの演習を見には行かなかったが、他の目付からの報告を聞き、その性能は認められたものの、とにかく蘭学洋風を嫌う鳥居にとって高島の成功が妬ましかった。

鳥居は頭脳明敏で、行動力、事務能力に長け、その限りでは有能な官吏であったが、性格は陰険で、出世欲と同時に嫉妬心が異常に強かったようである。しかも洋学は日本を滅ぼすと信じて疑わない狂信的な保守主義者であった。

高島秋帆がもてはやされ、幕府の中で台頭してくることを許せない鳥居は、後に高島らが演習して見せた洋式大砲は「密輸入の疑いがある」、さらに嵩じて「謀反の疑いがある」と讒訴し、ついに高島を逮捕、投獄してしまう。

前将軍の喪が明けた5月15日、水野越前守は城中に大名・旗本を集め、天保改革の断行を宣言した。

後世に江戸幕府の三大改革の一つと称される幕政や諸藩の改革の総称で、質素儉約の重農主義を基本とした享保・寛政時代への復古を目指し、貨幣経済の発達に伴って逼迫した幕府財政の再興を目的とした。

幕府の風紀が乱れ、賄賂が横行した大御所時代の元凶として、水野忠篤（御側御用取次）、林忠英（若年寄）、美濃部茂育（小納戸頭取）、田口喜行（勘定奉行）、中野清茂（元新御番組頭）などの高官が処分され、代わりに真田信濃守幸貫が老中になるなど、水野の意にかなった人材が新たに登用された。水野の腹心鳥居耀蔵は目付として改革の推進役となった。